

祇園小学校 校長だより（第30号）

平成31年1月8日

「清心」

文責 校長 中原弘之

学校教育目標 「学校と地域を愛し、知・徳・体の調和のとれた児童の育成」

新年、あけましておめでとうございます

平成31年（2019年）の輝かしい年をお迎えになられたことと思います。子どもたちも職員も、新しい年を迎え張り切っています。亥（いのしし）年にふさわしく、地にしっかりと足をつけ、力強く歩んでいきたいと考えています。

通学路関係工事のお知らせ

1月7日（月）から5月24日（金）までの予定で、千住病院A棟（信号のある三叉路に一番近い棟）の改修工事が行われます。通学路として使用している病院前の歩道は通常通り通行できます。大型車両が入る場合は交通誘導員が立たれるそうですので、登下校に支障はないものと思っています。

祇園歴史の旅（その30）「平戸往還沿いの史跡」

中部地区町内協議会設立25周年記念誌（平成20年発行）、佐世保史談会会員の筒井隆義さんの記念エッセーより抜粋。「沿岸航路の船便と共に、内陸部の道路も暮らしを支える要素です。戦国時代の郡境の目印だった桜木町の山中観音堂は、文明7年（1475）有馬氏に敗れて佐々に逃れていた大村純伊（すみこれ）に部下が連絡を取るために通った話が『大村家覚書』にあります。

徳川時代に入って世の中が落ち着き、幕府は国内の主要道である東海道、中仙道などの幹線道路である五街道を整備し、松並木や一里塚、宿場、馬つなぎ場などを設けました。平戸藩もこれにならい、領内の中心となる平戸往還を整備したのです。

中部地区の道筋は、谷郷町から九品寺裏を通過して名切谷に下り、ソフトボール場を通過して千住病院横を抜け、裁判所と検察庁の間を通過して松浦鉄道のガードをくぐり、中部地区公民館の東を進んで西の峰の坂を登り、山祇神社付近の馬つなぎ場に至る道でした。

平戸往還の整備は寛文5年（1665）、その翌年に建てられた大神宮石碑が千住病院の中庭に移設されて残っています。大神宮は伊勢神社で、庶民の願いは『一生に一度はお伊勢詣り』。江戸時代の260年を通過して盛んに行われたお伊勢詣りは、御師（おし）と呼ばれる今日の観光ガイドもいて賑わいました。村では『伊勢講』が盛んで、一定の金を出し合って積み立て、代表がそれを路銀に伊勢神宮に参拝、帰ってきて参拝記念の石碑を建立することが広く行われていました。

このほか、宮地獄神社の裏の平戸往還沿いには、行路病者などを慰霊する三界万霊供養塔、中央公園内の山祇神社には庚申塔があり、この碑も道祖神として平戸往還の旅人の安全、村人の安全を念じたのです。

ちなみに、千住病院が建つ丘は、古い地名の字で『櫛（はげ）山』。暮らしに必要な明かりを灯すろうそくの原料が櫛の実で、農家は稲作の副業として養蚕と共に櫛の栽培もしていました。こうしたことから考えると、名切谷は名切川沿いに下流から古新田（いまの松浦、常盤町）、浜田（熊野町）、大田（ソフトボール場から交通公園にかけての中心部）、前田、迎田、黒田（花園、山手町）といった字が示すとおり、田園が広がっていました。

小佐世保川流域は、川流れ、後川内、どどろ川内といった川にちなむ字名が目立ち、耕地にはあまり恵まれていなかったようです。高天町から小佐世保町にかけては、焼山、炭釜、稗田という言葉ば副業的農産物をつくった地名が残り、大谷、西谷、小谷の谷あいを示す字名が目立つので、川が谷をつくる急流だった状況を物語ります。地元で小佐世保谷と呼ばれるゆえんです。

いまの戸尾市場付近から四ヶ町入口、塩浜町にかけての地は、地元の大地主、浜崎七郎左衛門が、江戸時代後期の天明・寛政のころ、西暦1700年代末に干拓を始め、のち山県家に譲った土地です。いまの山県町に名を残す山県三郎大夫が開拓に着手し、6代目山県金十郎までの90年間をかけて造成した地区なのです。」

次回は、「明治維新、そして軍港建設へ」と題して軍港として発展してきた様子をご紹介します・・・